にいがたの
くらしと自治

2026 年 2 月号

2026 年 2 月 15 日

▲2026年 1 月 11 日、「再稼働 許していいのか 1/11 集会」参加者（県民ネットワーク HP より）

にいがた自治体研究所

〒950－0901 新潟市中央区弁天 3 丁目 3－5 新潟マンション 305 号

TEL 025－240-8645 Fax 025－240-8646

e-mail：njitiken@yahoo.co.jp

「にいがた自治体研究所」のホームページへ⇒

「柏崎刈羽原発再稼働の是非を考える新潟県民ネットワーク」が主催した集会における、リレートークの内容を刑させていただきます。なお、笹口孝明元巻町長のご報告は、当研究所の新刊ブックレットに「特別寄稿」として掲載する予定です。

柏崎刈羽原発再稼働　許していいのか 1.11 集会

2026 年 1 月 11 日(日)、万代市民会館　参加者:対面 180 人、Zoom40 人、計 220 人

＜リレートーク＞

1. 石崎誠也さん(新潟大学法学部名誉教授)　県内在住の学者・研究者有志の声明

新潟大学元教員で弁護士の石崎です。

行政法を専攻し、昨年は県民投票の適法性や重要性、県知事が「議会に信を問う」事の地方自治法上の問題点について、新潟日報で明らかにしてきました。しかし、12/22 に県議会で似非的な信任決議がなされ、県知事が再稼働に「同意」するということがありました。1月に再稼働、2月には営業運転が始まるという事で、新潟大学や新潟国際情報大学などの学者、研究者として再稼働の中止を求める声明を出そうとしています。私たちは専門的な立場からの発言をしたいという事もあり、この声明は後程ネットワークにあげていきたい。

内容は大きく2つに分かれており、1つは今回の「同意」に手続き上の問題点があることをあらためて指摘しています。それは私たち法学系から批判しています。

併せて経済的視点で東京電力が拠出しようとしている1千億円に問題があることを指摘してきました。これを書いたのは柏崎で交付金が地域振興に役立っていないと研究してきた先生によるものです。

重要なので読みますと、「これまで新潟県への交付金や経済波及効果は経済神話であり地域には貢献しませんでした。そもそもお金を払えば危険な原発に頼ることは県民の命を売り渡す行為です。県民の生命と生活を軽んじているものも他なりません。私たちは今回の再稼働同意に強い懸念を持つものです」という社会科学的な立場からの意見です。

続いて自然科学系、物理学などの先生から原発問題の意見を提起していて、原発を再稼働することがいかに危険なのか詳しく書いていただくことになっています。特に原発は放射性廃棄物がどんどん溜まっていくわけで危険ですし、その処理には長い年月がかかる。一旦事故が起きた場合は過酷事故の危険性が高いものと指摘しています。特に新潟の場合は、地震の可能性が高い地域に抱えていることも指摘しています。それに対して避難体制の確保がなされていないことも指摘しています。このように私たちは、それぞれの研究分野から原発再稼働に関する問題点を指摘して、中止を求める声明を出しました。

再稼働を始めるという事ですので賛同した人の名をもって東京電力及び県知事に申し入れたい。賛同者は2月いっぱい募り、2月には営業運転をやろうとしているので、あらためてその時に申し入れたい。こうした形で県内の学者、研究者が発言しているので多くの県民の協力を

いただければありがたいと思います。

2. 浅利親男さん(荒浜在住、PAZ 住民の会) 柏崎刈羽原発反対運動の歴史

柏崎市荒浜は柏崎刈羽原発の地元で PAZ 即時避難区域から来ました。PAZ 住民の会として、昔から反原発活動で活動している方々と、2021年には大雪で車がスタックして国道が立ち往生で通れず、家から出ることもできない。これでは避難できないという事から始まって、県の原発に対する動きを気にしながらPAZ 住民の会を再起動させています。そのメンバーの１人の浅利です。

自分が原発とかかわったのは、田中角栄という総理大臣が最初は自衛隊を新潟に引張って来るとかやっていたらしい。柏崎は人口が少なくて水もあって、自衛隊に水は必要なのかと思いますけど荒浜に目を付けて話が進んでいったらしい。話がおかしいというのが何もない所に自衛隊を持ってくるというのはもっと他の所でも良かった。人がいなくて産業も成り立たなくて砂丘地荒浜だというと人が来ても不便な所でおかしいなと考えていたところ、原発を持ってこようというのが荒浜です。最終的にどこにつくるか人が少なくて水がいるから荒浜にというのが誘致までの話です。

私はその頃小学生で、いろんな人が家に出入りしていた中で見たり聞いたりしていた。うろ覚えのところがあるので今お話しすることが正確な事ではないこともご理解いただいて聞いてください。誘致はそういう感じでして、2025年皆さんが県民投票協力いただいて14万筆を超える大きな数を出したが、プルサーマルの住民投票と同じように県議会、自民党の人たちは、そぐわないことだから通すことはできないと却下した。

荒浜で住民投票を最初やろうと決意した当時の柏崎市長が、町内会長の所に行って「賛否で町内が分断するからそういうことは良くないだろう」「どうか穏便に」という話をしたらしい。その後もいろんな妨害活動やいろんな人が来て話をしていきました。

1972年7月、区長さんの中で「集まって住民の声を聞こう」となって、当時の荒浜は 11 区あり、その中の区長が集まってじゃあ住民投票をやろうということで始めたわけです。この住民投票は1世帯1票で、今回の県民投票は家族全員とかでしたが、1世帯1票だからお父さんでもいいしお母さんでもいい。当時の荒浜総戸数が 392。ぎりぎりまで市の関係者の人たちあるいは与党議員の妨害行為があって、街宣車も昼夜「住民投票はするな」という事があったと聞いています。でもそれに負けずにやっぱり自分たちのことだから自分たちで決めようじゃないかということで、1世帯1票という形で住民投票することとなった。自主投票という事で法的拘束力はないけどもやろうという事で 7/15 にはやっぱり妨害行為も入って、住民はなおさらやろうという気持ちになった。住民投票は普通明るい時間とかみんなが動けるような時間が良いと思うのですが、その日の夜にやって結果が出るまで荒浜公民館のステージの上で開票した。

午後 10 時 20 分から開票はじめて結果が出た。総戸数は 392、投票数 329(投票率83.9%)、原発反対 251、賛成 39、白票 35、無効 4 でした。投票数の 76%が反対した。本来で言えば原発なんて無かったのです。それが通らない。市は「自主投票ですのでこの数字を丸々受け取ることはできない。」という事で却下され、誘致は決まり建設まで向かって行った。

それが先輩がやった、自分は小学生でいろんな人が出入りしてそばで見ていた。
今日のテーマで言うと住民の声は数字でちゃんと出ているのに聞かないで、国からの圧力で県知事は県民の方を向かないで国の方を向いて決めている。今のシナリオは全くそうだと思います。自分たちとしてはまた選挙があるので、当然勝っていかなければならない。県知事をチェックしていかなければだめだ。そういう時期が来たら皆さんの力をよろしくお願いします。
司会者：荒浜の住民投票は全国初ということです。

3. 笹口孝明さん（元巻町長）→新刊ブックレットに「特別寄稿」として収録予定。

4. 片岡輝美さん（会津放射能情報センター） 福島原発事故の経験から
会津放射能情報センター所長をしています片岡です。3年前に柏崎刈羽原発差止め訴訟の原告として、意見陳述をしました。
これは福島民報の2011年3月16日の記事です。「3月15日は弱い北東の風が内陸部に吹いた。3月16日は未明から強風が内陸部から海岸に流れる」というもので小さな記事であの大混乱の時に、記事に気がついた県民は本当にわずかだったのではないでしょうか。

福島第一原発から空中に放出された高濃度放射性物質の8割から9割は、偏西風に乗って太平洋の海と空に流れたと言われています。
これは日本原子力開発機構が発表したシミュレーションです。このように大地や海に放射能汚染が広がったという事が如実に分かる資料になっています。この放射能の風プルームの先に居たのが津波被災地に北上している「トモダチ作戦」の米兵たち原子力空母ロナルドレーガンです。乗組員が5000人いて、この放射能プルームの中にすっぽり入ってしまった。乗組員たちは外部被曝だけでなくシャワーや食事の調理に使った水で内部被曝をしました。頭痛や吐き気、下痢、下血、髪の毛が抜ける、皮膚が焼けるような痛み、生殖器の異常など、次々に異変を訴えました。後に骨髄腫やガンを発症して亡くなった人もいます。屈強な若者たちが健康を奪われ、人生が変えられてしまったわけです。
私の知り合いで会津若松市に住んでいる方で、今から20年ほど前に柏在刈羽原発から飛ばされた風船を拾った方が居ます。その風船には手紙が付いていて「風船を拾ったら連絡が欲しい」と書かれていました。早速その方が連絡をすると驚く事にその風船は2時間で柏崎刈羽から会津若松まで飛んできたことが分かりました。それは春先のことで強風が吹いたわけでもなく、ごく普通の日とその方は証言しています。会津若松は柏崎刈羽から西に120kmです。この距離を風船は2時間で移動したことになります。
これは柏崎刈羽原発で事故が起きれば、数時間又は半日程度で日本列島に汚染が拡がるという事を示しています。またレーガンの乗組員に起きた放射線障害が私たちに起きる可能性が極めて高いという事が明らかだと思います。
2011～2013 年にかけて、政府はリアルタイム線量測定システム、通称モニタリングポスト3000 台を福島県内の学校や幼稚園、公園や駅に設置しました。空間線量を測定して数値を表示し、その場の環境が分かるものになっていました。特に子どもたちが生活をする環境にモ

ニタリングポストは置かれました。
　しかし、2018 年 3 月原子力規制庁はこの 3000 台の内 2400 台を撤去するという方針を出しました。その理由は除染などによって空間線量が安定してきたから。または、維持費の確保が困難だからという事でした。規制庁は丁寧な説明で撤去を理解してもらおうと 2018 年 9 月から 11 月の間、県内 15 会場で 18 回の住民説明会を開催しました。
しかし、どの会場でも撤去反対、継続配置を求める声が相次ぎました。私たちはこの方針を受けてすぐに仲間で集まり、「モニタリングポストの継続配置を求める会」を立ち上げて、原子力規制庁との交渉を重ねました。またこれまで行政交渉もしたことないお母さんたちも子どもを背負い、子どもの手を引いて市長や町長に面会、そして申し入れ、議会へは請願、陳情を行いました。ついに 2019 年 5 月原子力規制委員会はモニタリングポストの当面の存続を決定しました。市民の力が国の方針を変えて大量撤去を阻止したことになります。そして先週来年度の維持管理費などに 12.8 億円の予算案が計上されました。
この住民説明会の一番最初に開かれたのは新潟県の隣の只見町でした。私は福島第一原発から一番遠い所から説得していくのだと思いました。そして恐らく住民もその距離ゆえに撤去を認めるだろうと思っていました。しかしそれは本当に私の勝手な思い込みで、失礼な想像だったことが分かりました。只見町の参加者からも反対の声が相次ぎ、小学校、中学校の校長先生は「子どもの将来に責任を持つ教育者として撤去していいとは言えない」と。またある町民の方は「原発事故が終わっていないのに撤去は無責任だ」と仰いました。「只見町は西風がよく吹くからポストが必要なんだ。」、「柏崎刈羽から 60 数kmの所に何かあったらこのポストの数値を見て避難しなくてはならないことになる。」
　このように私たち福島県民は東京電力福島原発事故の現状だけでなく、柏崎刈羽原発の再稼動にも大きな不安を感じています。
一方震災直後から新潟県の自治体、そして市民団体の皆様に私たちは助けられました。被災者をたくさん迎え入れて下さった自治体の皆様、市民の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。
2011 年 3 月 15 日から 2 週間私も避難しました。末息子と私の妹と妹の子ども 2 人連れて三重県鈴鹿市の親戚宅へ避難しました。そして 3 月末に自宅へ戻りました。戻った理由の一つは震災前から末息子が新潟市内の高校に入学することになっていたからです。福島第一原発とは全く反対の新潟に子どもを住まわせることができることは親として本当に大きな安心でした。その子を新潟県に送り届けた後、私は 9 条の会の仲間と「会津放射能情報センター」を立ち上げました。事故直後から既に県内は「放射能安心・安全キャンペーン」が席巻していました。しかし、事故の隠ぺい、過小評価する国、県、東電に対して県民の怒りも大きくなっていた所でした。その大きな怒りや疑いを持つ会津地方の市民又は会津地方に自主避難してきたお母さんたちが情報センターに集まってきました。
情報センターの活動の柱は、自分たちで安全を確認するために「測定」を続けること。真実を知るために集い学び合うこと。子どもたちの命と未来を守るために大人である私たちがつながることです。2012年春から12年間私たちはいつでも家族が使える保養施設「新潟ハウス」を新潟市内に設けておりました。これは日本キリスト教団新潟教会との共同運営になりまして、

延べ277人の親子が利用しました。
　新潟の自然、新潟のおいしいものを思う存分味わいました。情報センターにつながるたくさんのお母さんの中に郡山市から会津若松市に自主避難した方がおりました。
　ある時その方が息子さんのサッカーソックスを放射能測定器で測定したところ、セシウム134と137が検出されました。つまりソックスの生地の間に放射性物質がこびりついていて、洗ってもそれは落ちないという事が分かりました。悩んだ末に彼女は新潟ハウスを利用して、親しみを覚えていた新潟市への避難を決意し、そこで2人の息子を育て上げました。15年間彼女は避難の辛さを経験し、子どもたちに無用な被曝をさせた後悔と闘ってきました。小学生だった長男は社会人となり夢を追いかけています。次男は高校生となって心から学校生活を楽しんでいます。このかけがいのない日常が原発核災害によって再び壊されこの家族が新潟の地を追われることは決してあってはならないと私は考えています。
　最後に私からの提案です。ハガキアクションはいかがでしょうか。私は子ども被曝裁判に共同代表として10年間関わってきました。仙台高裁、最高裁の裁判官にハガキを送り続けてきました。最高裁には1年間で 1500 通届けました。裁判は結局敗訴となりましたが、司法の壁は高く厚くを実感しました。でも、このアクションを通して私たちが鍛えられたことは間違いありません。自分の言葉で原子力災害の実態を訴え、子どもの権利を守れという思いを短いメッセージに託すという事は、学びと仲間がいなければできなかったことです。皆さんそれぞれが自治体の長にハガキメッセージを送ることも良いと思います。また一所に集めてメディアの前で渡すなど話題性を持たすことも良いのではないでしょうか。
　これからさらに大切になっていくのは私たち一人一人が主権者としてできることに誠実に取り組むことだと思います。東京電力福島第一原発核災害を忘れないこと。そして再稼働に反対すること。そして被曝は嫌だと声を上げ続けること。安心して生きる権利を諦めない事だと思います。もしも、この運動に疲れを覚えたら隣の仲間に頼ることも良いと思います。そうやって私たちは少しずつ力を集め、私たちの後に続く命のために、したたかに動き続けて行きましょう。
　東京電力柏崎刈羽原発再稼働阻止のために奔走される皆さんに心からの感謝を申し上げます。ありがとうございます。皆さんの踏ん張りに心からの敬意と感謝を申し上げつつ新潟県の隣、会津地方からの連帯のメッセージとさせていただきます。ありがとうございました。

5. 佐々木かんなさん 「アンダー30 の会」から考えること

　原発に関する論点を話し合う「アンダー30 の会」を代表して声掛けしていただいた佐々木です。皆さんの説得力あるお話で緊張しているのですが、何で私が若者の話し合う場を作りたいと思ったのか、また再稼働について率直に思うことを話したいと来ました。

　私は再稼働の是非を問う県民投票を実現する為の世話人としても活動してきました。県民投票に反対する参考人の方が、「原発の問題は高度に専門的なものなので、県民投票はその再稼働の是非を決めるのに相応しくない」と言いました。私は県民投票に反対するというより

は「県民には判断できない」、「専門家でないと分からない」というようなメッセージに対して憤りを感じました。今回の再稼働の強行的な決定からもこの態度が染み出ていて許せないという思いでした。

そして同時に思ったのがそもそも原発の問題は十分に人々に知られているのだろうか、もちろん意識調査や県民投票の活動を通して関心は高いと分かっている一方で、自分の周りを見て気兼ねなく話し合える場やつながりがあるのだろうか。そういった機会がないというのは個々人の能力の問題ではない。まして正しいことや正解を誰かが示せる訳ではないと思いました。

そして実際に 30 代以下の人たちで勉強会を開くことになり、会を開いてみました。参加者からは興味あったけど何が正しい情報かも分からないし、まして自分は被災しているわけでもない、柏崎に住んでいるわけでもない。けれども皆と勉強したり、話し合ったりする場所が欲しかったという声が出ました。

広報が余りできず SNS で数回投稿しただけで身内が集まれば上々だと思っていた会に、会ったことも無い同世代が参加してそういう声を残してくれました。

考える場や議論の場を作ることを私たち 10 代、20 代はこれからの社会や人間が作った技術と長く付き合って行かなければならない。にも拘らず本当に蚊帳の外に置かれているのではないかと感じています。それは賛成か反対かという以上に、政治について話し合う権利を剝奪されていると思います。私たちは積極的に無理してでも作って行かないといけないと思いました。

ソソテックというワークショップをやる会社の知り合いは、「白黒つけて乾杯しようか」という政治について話し合うワークショップシリーズという活動があるのですが、素晴らしいと思います。

主に新潟のアクセスのいい所でやっていますが、自分は西蒲区のアクセスの悪い所にいるので、自分でも場を作ってと思いました。そんな思いに共感した同世代の仲間で県民投票の意見陳述した新潟大学 OG の寺田さん、長岡技術科学大学院生の吉川さんと勉強会を始めました。

まだイベントも1度しか行っていませんが、3人で話し合っていることは賛成、反対の意見を強く持っている方を一堂にお招きして、学生がそれを基に議論するという事を行っていきたいと思っています。もちろん自分は反対派であるのですが会としては中立で議論の場を作るという事にしたいと思っています。

ここで我こそはと思う方ぜひ声掛けしたいと思いますので私たちの会でお話しいただきたいと思っています。再稼働が決まってしまった後、こんな小さなこととか地道なことしても今日、明日再稼働が止められる訳でもないし、あまり効果的ではないかとも、でも、反対を主張する勇気、一歩が踏み出せない人の声を封じてしまうのではないか。でもそんなことを考えている間に事故が起きたらどうしよう。そんな葛藤がありながら活動しています。ただこうした場を作ることはすぐに効果が出なくても自分が直接反対運動するのと同じくらい大事だと信じて場づくりをつ続けていきたいと思います。今後も皆様の知恵をいただければ嬉しいです。再稼働の是非は私たち県民が決めると言える人、主張できる人を一人一人増やしていきたいと思っています。